

ネギえそ条斑病及び媒介昆虫ネギアザミウマの発生生態の解明と防除対策の確立

■開発のねらい

アイリス黄斑ウイルス(IYSV: Iris yellow spot virus)によるネギえそ条斑病は、平成26年に府内で発生が確認され、出荷量の低下や減収を招いて大きな問題となっています。そこで、本病及び媒介昆虫であるネギアザミウマの発生生態を解明するとともに、効果的な防除対策を組み立てました。

■技術の効果

- ・ネギえそ条斑病は4月初めから増加。近接するタマネギも感染源となるため、ネギと併せてネギアザミウマを防除する必要あり(図1)
- ・薬剤感受性が低いネギアザミウマの産雄系統を南丹市以南の地域で確認。殺虫効果が高い農薬で防除を行うことが重要(表1)
- ・さらに、ほ場周囲への赤色ネット展張による侵入防止や作付け前(1月頃)のバスアミド処理を組み合わせることで保毒虫密度を低下させ、ネギえそ条斑病の発生を大きく抑制(図2)

■経営への効果

ネギえそ条斑病及びネギアザミウマの発生生態を踏まえ、作付け前のバスアミド処理や効果の高い農薬を使用して防除を行うことにより、農薬使用回数を28%(25回→18回)、農薬費を32%削減することができます。(表2)

■普及のポイント

- ・赤色ネットの活用方法は、本冊子の2ページを参考にしてください。
- ・ネギアザミウマの発生源となる収穫残渣をまとめてビニルで覆うなどの処理を併せて行うと本虫密度を抑制でき、より効果的です。
- ・本研究の成果をとりまとめた「ネギえそ条斑病防除マニュアル」を作成しました。



図3 本研究成果を活用したネギ生産ほ場

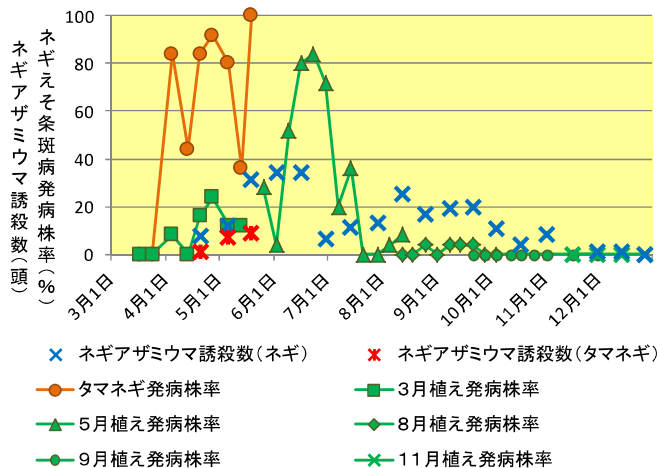


図1 ネギ及びタマネギほ場におけるネギえそ条斑病の発病株率とネギアザミウマ誘殺数の推移(対策前:平成28年)

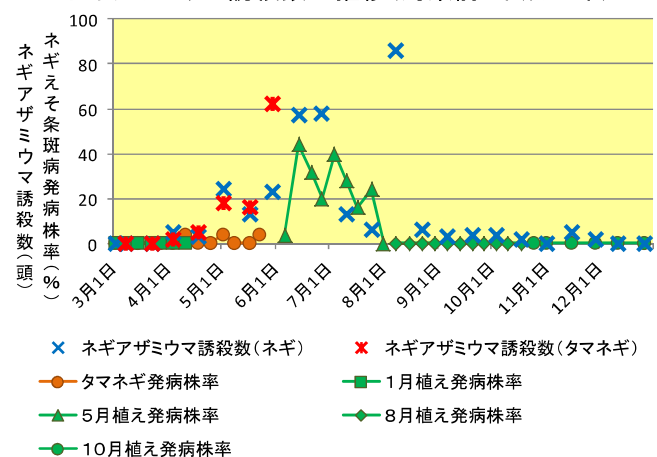


図2 ネギ及びタマネギほ場におけるネギえそ条斑病の発病株率とネギアザミウマ誘殺数の推移(提案技術取組後:平成30年)

※ 図1、図2は京都市内ほ場で調査したデータ

表1 ネギアザミウマ防除に効果の高い殺虫剤

	殺虫剤名
産雄系統・産雌系統ともに効果がある農薬	スピノエース顆粒水和剤
	ディアナSC
	アグリメック乳剤
	ベネビアOD
産雌系統のみに効果がある農薬	アグロスリン乳剤

- ・処理48時間後の補正死虫率が概ね50~80%以上の殺虫剤
- ・産雄系統は単為生殖で雄を、交尾すると雌を生む生殖系統。産雌系統は、交尾せずに雌だけで増殖する生殖系統。

表2 本研究成果を活用した防除による農薬削減効果(1作当たり)

	提案技術	慣行	削減率(%)
防除開始時期	3月下旬	4月	—
散布回数(回)	18	25	28.0
農薬費(円)	¥53,000	¥78,000	32.1

問い合わせ先: 農林センター環境部 0771-22-6494